

学校体験活動による教職課程の充実の取り組み — 教職課程初年次の保育教育職現場体験活動の実践 —

Enhancement of a teacher training curriculum
through school volunteer activities

牧 瀬 翔 麻
(保育教育学科)

キーワード：学校体験活動、インターンシップ、ボランティア、教員養成

1. はじめに

児童生徒の多様化と社会の急速な変化を念頭に、中央教育審議会は2021年1月、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を答申した。答申が「令和の日本型学校教育」を実現する教職員の養成・採用・研修等の在り方の検討を提起したことを契機に、その後、中央教育審議会及びその下に設置された『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方特別部会」は、①教師に求められる資質能力の再定義、②多様な専門性を有する質の高い教職員集団の在り方、③教員免許の在り方・教員免許更新制の抜本的な見直し、④教員養成大学・学部、教職大学院の機能強化・高度化、⑤教師を支える環境整備の5点について具体的検討を行った。検討を踏まえ、2022年12月には、『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について「新しい教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成（答申）」がまとめられた。

このうち、①教師に求められる資質能力の再定義と④教員養成大学・学部、教職大学院の機能強化・高度化の文脈において、学校体験活動の拡充・充実が提案されている。ここで学校体験活動とは、「学校における教育活動その他の校務に関する補助、または、放課後・休日等の学習その他の活動の補助、を体験する活動」（同答申、p.12）及び「学習指導員としての学校教育活動の支援や、放課後児童クラブなどにおける放課後や休日の学校・児童生徒等支援等」（同答申、p.32）と説明されている。後述のとおり、筆者が所属する学科では、就学前の幼稚園教諭一種免許状・保育士資格の取得が可能であり、保育所・こども園等のボランティア活動も多く取り組まれている。本稿は便宜上、保育職・教育職を目指す学生による現場体験活動・ボランティア等を総じて、学校体験活動と称する。

2019年4月に施行された改正教育職員免許法及び同法施行規則により、学校体験活動（いわゆる学校インターンシップ）をもって教育実習の一部を代替できることとなった。ただし、学校体験活動による正の効果が認められる一方で、実際に教育実習の一部を代替している大学は僅少である（原ら2019、浅田ら2021）。実際に教育実習の代替として扱わなくとも、前掲の2022年答申が指摘するように、学校体験活動の積極的活用は、教職志望学生の教職観及び児童生徒観に寄与し、基礎的な実践的指導力の修得に対して意義があると考えられる。峯村ら（2020）は、小学校教員養成課程を置く全国の大学を対象に学校体験活動の開講状況について調査を実施している。調査によれば、46校の回答大学のうち34校が正課の授業として学校体験活動に相当する科目を開講しており、大半が1・2年次の開講に集中していた。また、科目の目的として「教師の職務全般、児童・生徒指導、教師の意味や教師として働くことの意味、児童・生徒、教師の役割それぞれに対する理解」の深化が中心となる傾向にあり、この目的以外に「キャリア意識の変容、児童・生徒と接する際の態度の変容、より積極的に関わろうとする意欲の向上、礼儀やマナーなどの態度の変容」といった成果が表れたことを明らかにしている。

以上の教員養成課程の政策的な背景及び実践上の事例報告等を踏まえ、本稿では、筆者が所属する島根県立大学人間文化学部保育教育学科が開講する保育教育職現場体験活動Ⅰ・Ⅱの取り組みと成果・課題を報告する。

2. 保育教育職現場体験活動の位置づけと概要

本学科では、4年間の在籍中に必要な科目等を履修することにより、小学校教諭、特別支援学校教諭、幼稚園教諭のそれぞれの一種免許状と保育士資格の取得が可能なカリキュラムを編成している。学生は、卒業後の希望する進路等に応じて2免許の履修モデルを選択する。加えて、二年次進級時のGPAが所定の基準を超えた場合は、2免許モデルに追加して3つ目の免許・資格の取得が認められる。学生が、一年次に各分野の基礎科目を受講する中で履修モデルの希望を固められよう、体系的な教育課程となっている。

保育教育職現場体験活動Ⅰ・Ⅱは、2022年度入学生から一年次に新設した必修科目である。年間を通じて、保育・教育・児童福祉の基礎を学ぶとともに、現場観察・見学及び体験活動を踏まえて、各現場の実態と各職種の職務内容を理解し、専門職として求められる基礎的な資質・能力を身に付けることを目的としている。本科目で観察・見学を通して専門職理解を深めたうえで、進級時に希望する取得免許を決定できるよう、新設科目を導入した。まず、保育教育職現場体験活動Ⅰは、春学期に開講され、毎週の講義と夏季休

図表 1 保育教育職現場体験活動 I の授業概要（2022 年度）

	内容	担当
①	本科目の意義と概要	科目担当教員
②	専門職として地域から期待されていること	学科教員
③	保育・教育職の概要と地域で育つ子どもの姿	科目担当教員
④	幼児教育・保育の概要と幼児理解の意義	学科教員
⑤	幼稚園現場の仕事紹介	松江市立幼保園のぎ園長
⑥	小学校教育の概要と児童理解の意義	学科教員
⑦	小学校現場の仕事紹介	松江市立乃木小学校校長
⑧	ボランティア活動の安全・保健管理 ボランティア活動の心構えと計画立案	教職センター 特任教員 学科教員 科目担当教員
⑨	特別支援教育の概要と児童・生徒理解の意義	学科教員
⑩	特別支援教学校の参観（松江養護学校乃木校舎を訪問）	
⑪	特別支援学校生徒との交流（松江養護学校高等部来学） 図画工作授業の交流／学生によるキャンパス案内	
⑫	児童福祉施設の概要と児童理解の意義	学科教員
⑬	児童福祉施設の仕事紹介	児童福祉施設 保育士 児童発達支援 管理責任者
⑭	春学期の振り返り・夏期休業中のボランティア活動	科目担当者
単位取得のためには、上記の授業に出席のうえ、19 時間のボランティア活動（学生自身が活動先を開拓・調整）が必須。		

業中に実施する 19 時間の自主ボランティア活動で構成される。自主ボランティア活動は、各学生が関心のあるボランティア先に直接打診・活動の内諾を得て、実施した。大学は、適宜ボランティア求人の一覧を共有したり、学科教員が携わる子どもボランティア等を紹介したりした。次に、保育教育職現場体験活動Ⅱは、Ⅰの履修を前提に、夏休み後期に実施する 3 日間の学校体験（小学校 2 校と特別支援学校 1 校）と 15 時間の自主ボランティア活動により構成される。開講初年度となる 2022 年度の授業概要は、図表 1 及び図表 2 のとおりである。新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって当初の計画から修正を余儀なくされた部分も多く、次年度以降の変更・修正の可能性も大いにあることに留意いただきたい。本科目は、筆者を含む学科教員 2 名と教職センター特任教員 2 名が主な科目担当として対応し、必要に応じて他の学科教員の協力を仰いで運営した。

まず、保育教育職現場体験活動Ⅰは、初年次の春学期開講科目であり、履修モデルの選択に際して、学生の参考となるように講義内容を構成した。初

図表 2 保育教育職現場体験活動Ⅱの授業概要（2022年度）

内容	
9月	ガイダンス、学校体験の内容・留意事項 特別支援学校訪問の留意事項
	Aグループ 21名
	Bグループ 22名
	出雲養護学校
	忌部小学校
	乃木小学校
	出雲養護学校
10月	保育・幼児教育の参観の代替演習（保育現場の一日の流れ等）
	保育・幼児教育の参観の代替演習（乳児保育・表現演習活動の体験）
11月	ボランティア活動・学校参観の振り返り
15時間	のボランティア活動（学生自身が活動先を開拓・調整）が必須。
2月	ボランティア活動の報告会

回から第3回講義までは、科目担当教員を中心に本科目の趣旨や目的、専門職養成課程の学修について解説を行った。第4回以降は、幼児教育・保育、小学校、特別支援学校、子ども家庭福祉の各分野について、学科教員による講義と現職教職員による講話をセットとして授業を展開した。講義にあたり、4月の段階で学生から各分野に対する疑問や質問をとりまとめ、各講師による回答を含む形での講義内容の検討を依頼した。上記に加えて、特別支援学校は、学校見学及び生徒との交流を実施した。大学近隣の島根県立松江養護学校乃木校舎を訪問し、特別支援学校校舎の特徴や配慮されている点を確認した他、高等部生徒の作業活動を見学したり、食堂サービス班による昼食をとったりして、特別支援教育の理解を深めた。また、翌週には、本学に松江養護学校乃木校舎の3年生を招待し、一緒に図画工作の授業を模擬体験したり、学生によるキャンパス案内を実施した。学生と生徒の年齢が近いこともあり、共通の関心や話題を通じて会話が盛り上がる様子が各所で見られた。講義だけでなく直接生徒と交流を図ることで、特別支援教育の意義を再確認し、今後の大学での学修の動機づけの機会となった。

次に、保育教育職現場体験活動Ⅱでは、夏季休業中最終週に3日間の学校体験を実施するために、前週にガイダンスを実施した。ガイダンスでは、各校の1日のスケジュールや必要な配慮事項、新型コロナウイルス感染症対策の留意点等を説明した。また、今年度は体験にあたって、抗原検査を当日朝に実施することで感染拡大防止のための対策をとった。小学校の体験先は、大学近隣の乃木小学校及び忌部小学校に協力いただいた。乃木小学校は全校児童千人弱の県内最大規模の小学校であり、忌部小学校は一学年一学級の小規模校である。学生が2つの小学校を参観・見学することにより、多様な小学校の実態を理解することをねらいとした。また、出雲養護学校は、本学科が毎年、教育実習（特別支援学校）の受け入れ協力をいただいている学校であ

り、本科目の受講生の中から3年後の実習で出向く可能性のある学校である。小学部・中学部・高等部を有している。いずれの学校も実施にあたり、複数回の事前打ち合わせを実施した。今年度は特に新型コロナウイルス感染症対策への対応を入念に確認した。

小学校体験では、2校それぞれの各学級に入り、授業参観及び休憩時間・掃除時間等の終日を児童と過ごした。授業では、コロナ禍で加速したGIGAスクール構想におけるICTを活用した授業を観察し、学生の小学校時代と異なる教育実践に驚く声が多かった。また、学校規模の差異に起因する2校の教職員・児童の雰囲気の違いに気づくことができた。これまでに被教育者として経験した初等・中等教育ではなく、教職を志望する学生の視点から教員の言動や振る舞いの様子についてつぶさに観察する学生が多く、改めて教員の多忙さに着目する学生も多かった。

特別支援学校体験では、午前中に高等部生徒による学校案内と作業班の活動の様子を見学した。広大な敷地及び校舎の見学を通して、生徒に質問をしながら、特別支援教育に配慮した設計や動線になっていることを確認した。食堂サービス班の調理した昼食をとった後は、割り振られた各学級に入り、児童生徒の授業の様子を参観した。特別支援教育の実践の一端を見学し、教員による配慮や児童生徒の個に応じた指導の必要性について理解することができた。

年度当初は、上記の学校体験に加え、幼児教育・保育の現場観察を計画していた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の状況により、2022年度は実施を見送る判断をした。この代替として、学内での演習授業を3コマ相当分実施した。学科教員による乳児保育の演習授業と教職センター特任教員による表現演習の創作や模擬保育である。この時点では、保育内容の各領域の授業や乳児保育の演習授業は受講していない。したがって、対象年齢の乳幼児の発達等を踏まえた演習講義は、学生にとって有意義な体験となった。

これらの学校体験・演習とボランティア活動を踏まえた活動の振り返りを中間報告会（11月）と最終報告会（2月）として開催した。当初は、保育教育職現場体験活動Ⅰのボランティア（19時間分）の完了を8月末日に設定し、9月以降の学校体験前に振り返りを行い、気づきや課題を共有したうえで学校体験を実施予定であった。しかしながら、夏季休業中に新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、活動先の制約や学生自身の帰省等の移動の制限などから計画通りに進まず、ボランティア活動期限を9月末日、10月末日と2段階で延長した。そのため、本年度は11月上旬の中間報告会実施に至った。2回の報告会では、学校体験とボランティア活動のそれぞれの内容と気づき・発見等を中心にプレゼンテーションソフトを用いて事前に作成して

図表 3 「保育教育職現場体験活動 I・II を通して、身についた力・視点は何か」に対する自由記述回答の一部抜粋

子どもは可愛いという視点だけでなく、教育者の視点で見られるようになった。
さまざまなボランティアに長期的に参加することの大切さを学んだ。ボランティアを行うだけではなく、ボランティアの振り返り反省、活動報告までが、大切であるということに気づいた。
子供 1 人 1 人に応じて対応をその都度変える必要があること。どこまでを許容し、どこまでをしっかりとするのかの線引きが難しいこと。
継続して、ボランティアを行うことで、子供たち個々人の普段の様子が少しずつわかるようになり、少しだが、変化にも気づくことができるようになった。
実際に、現場で働いておられる先生方の様子を見ることで自分自身がどのように子供に関わっていきたいか考えて、実行してみることができた。
子どもによって家庭環境が違えば馴染みのあるおもちゃなども違うので、子どもの行動の背景には何かがあるのかを知り行動する必要性を感じた。
1 人だけにつききりにならず、広い視野を持って危険を防止することに意識を向ける力が身についた。
周りをよく見て行動することの大切さに気づいた。安全面も考慮した行動をしなければならぬと感じた。常に子ども側の視点にもなって考えなければならぬと感じた。
く、ボランティアでの自分の活動を振り返り、活動報告をし、今後の自分の子供との関わりや、授業、実習に繋げていくことが大切なのだと気づいた。活動報告をすることでたくさんの方の子供に対するさまざまな視点、考え方、関わり方を学ぶことができた。活動報告はとても有意義な時間であった。
子どもだけでなく、その子の育った環境を知ることも大切だと実感したので、保護者参加のボランティアでは保護者の方とも積極的にコミュニケーションをとるように心がけた。
争いが起きるのではないかと、危なくないかという視点で子どもを見るが増えた。この視点で見ることで、今後を予測する力をつけることができたと思う。
教師という職業を現実的な視点から学ぶことができ、自分に足りない能力を知ることができた。子どもと接することは得意な方だと思っていたが、褒めるばかりで注意することができず、自分の弱さを感じた。
対応力や状況判断力が身につく、教員という視点、教育に対する姿勢が変わった。様々な課題発見ができたことから、視野が広がり、対応力、状況判断力がついた。教員が子供にとってどのような存在であるべきか、自分の教育感が変わった。子どもに教える際に干渉しすぎてはいけないことや、こんな授業展開をしたい！というような具体的なイメージを持てるようになった。

もらい、当日各グループに分かれてそれぞれ発表することとした。学校体験の場合も学生によって参観した学年・学級が異なり、教育活動も多様であったため、他の受講生の報告が新鮮だったようである。加えて、ボランティア活動はさらに活動先が様々であるため、発表後の質疑応答も活発であった。

3. 学生による評価と振り返り

保育教育職現場体験活動 I・II の終了後、本科目受講生に対するアンケートを実施した。倫理上の配慮として、回答結果の一部を本報告の紙面上で公表すること及び同意しない場合は回答せずともよいこと、回答を成績評価と結びつけることは一切ないと説明し、回答は匿名で収集した。回答数は 42 名であった。

まず、「保育教育職現場体験活動 I・II を通して、身についた力・視点は何か

ですか」の問いに対する回答は、図表 3 のとおりである。学生の回答の多くは、ボランティア活動を念頭にしたものであった。ボランティア活動は、学生自身が自らの関心や希望する進路を踏まえて、選択・調整する。したがって、学生全体に対して実施する講義や学校体験と比較して、活動の前後での変化や気づきが多かったと推察される。ボランティア活動は、幼稚園・保育所・こども園、児童クラブ、小学校、特別支援学校、地域の NPO 等が開催する単発のイベントの補助、学科教員等が紹介するイベントの支援スタッフ等多岐にわたる。したがって、回答中の「子ども」が指す児童等の年齢は判然としないが、継続した複数回のボランティア活動から保育者・教員の職務性や子ども理解の意義等を広く理解することができたようである。また、実際に保育・教育の実践の場に参入することで、当初は意識していなかったリスク・マネジメントの必要性や保護者支援のニーズについて考える機会となっている。特定の活動先に中長期的に携わることで、子どもの変化に気づいたり、自らの反省点を次に生かした試行錯誤が可能になるなど、各学生が本科目の趣旨を理解して主体的に取り組むことができた。加えて、中間発表会の場で他の学生の様子を共有したり、意見交換したりしたことで、自身の活動について考え直す契機となったとする回答もあった。

次に、「保育教育職現場体験活動 I・II のボランティア活動で大変だった／苦労した経験は何ですか」の問いに対しては、図表 4 のような回答が挙げられた。新型コロナウイルス感染症の流行の波がある中で、計画的にボランティア先を確保することが難しかったとする回答が散見された。ボランティア活動先は、松江市が市内保育所等から収集したボランティア活動情報を一括して本学教職センターが周知をしたり、単発のイベントや大学へ募集のあった行事の補助スタッフの求人を案内したりして、活動先の確保と紹介を行った。ただし、学生の関心や志望する分野等と合致しないケースも見られた。そのような場合は、学科教員の仲介により活動先を確保できるよう個別に紹介を行った。感染症の他に、学生が苦労・困惑した点が、子どもとのコミュニケーションの取り方や集団と個へのそれぞれのアプローチの違いであった。保育・教育職を志望する学生にとって、教育実習・保育実習の初期段階で直面する課題であると推察される。活動先の規模や対象年齢、子どもと先生の距離感・雰囲気等の条件により左右されるものであるが、一人ひとりの子どもの背景や性格、興味・関心やそれへの関わり方は、当然多様である。継続して活動の場に参入し、子どもと丁寧なコミュニケーションを図りながら、信頼関係を築く意義を理解するきっかけになったと思われる。本回答からは、困難に直面したときにどのように対処、解決したのかについて全てを把握することはできなかったものの、適切に保育者・教員に助言を図表 4

「保育教育職現場体験活動Ⅰ・Ⅱのボランティア活動で大変だった／苦勞した経験は何ですか」に対する自由記述回答の一部抜粋

子供たち1人ひとりが色々な行動をするので、一気にみんなのことは見ることが出来ない。しかし、先生はそれを一気に見ないといけないので大変だと感じた。
子どもとのコミュニケーションの取り方が分からず苦勞した。児童それぞれに個性が異なるので意識しなければいけないことが違おうと接するのが良いか最初は分からなかった。
子ども同士で喧嘩が怒った際に、どのように声をかけていいか分からなかった。
子どもにしっかりと言い聞かせないといけない場面で、正規職員ではない自分がどこまで言って良いのか迷った。
児童クラブでのボランティアをした際に、部屋にいる子どもたちに満遍なく、平等に関わらなければならず、そこが大変だった。どうしても勉強や遊びをしていると、特定の子どもたちと関わってしまうことになったため。
授業で学んでいると思われて任される仕事もあったこと（おむつ交換等）。
一言も話さない子がいて、その子とコミュニケーションを取りたいと思ったが、無理矢理話しかけるのも良くないので、どう接したらよいか悩んだ。
私語をしないように注意する場面。大きな声で注意しても聞いてくれないし、人数が多い場合一人一人に言うことも出来ないので苦戰した。
年齢の異なる子ども数人を1人で監督する大変さがあった。それぞれに思いがあり、それを受け止めることが大変だった。年齢や子どもによって1人行動を好む子どもや、誰かと行動しようとする子どももいて、全体をうまくまとめることに苦勞した。スタッフの方々の柔軟な姿勢が多く見受けられ、子ども一人一人を尊重する対応が印象的だった。
新型コロナウイルスがあったため、衛生面等に留意しながらが大変だった。やはり児童クラブ等よりも保育所でボランティアさせてもらった時の方が苦勞する場面が多かった。その分、学びもあった。
子どもだけでなく、保護者との関わりも何度かあったが、保護者とのどのように関係を築いていくべきなのかが分からず、少し苦勞した。子どもの行動は予想できないものも多く、何も話してくれず止まっている子どもにどのように接すればよいか戸惑ったことがあった。
障がいのある子と遊びから教室に戻るとき、声掛けしたら動いてくれるだろうと思っていたらうまく伝わらず、遊びに夢中で戻れなかったこと。子どもが首の上から乗って抱きついてきて自分は息が苦しく、子どもも上から落ちたら危ないと思ったがうまく動けなかったとき。またその時周りの先生も子どもの対応で忙しそうに助けを求められなかった。
知的障害をもっておられる学生との関わり方が難しかった。小学校高学年くらいの異性の方と休み時間に遊ぶことがあったが、言葉を交わさずただ相手の遊びについていくことしかできなかった。もっと接し方を学びたいと思った。

求めたりすることで、保育観・教育観の醸成に繋がったり、子ども理解の深化の機会となる。また、学生は、活動ごとに日誌に記録をまとめる他、活動記録簿へ担当者のサインをもらうことを必須としている。多忙な保育・教育現場であるのを承知の上で、このような些細な時間に先輩教員らから指導を仰げるような学生の姿勢にも期待したいところである。なお、活動先によっては、本科目の趣旨や学生の学修段階が十分に伝わっていない事例もあった。市内の保育・教育関係機関では、年間を通して、他の養成機関を含む実習の実施やボランティア活動の受け入れが行われており、それらと混同されている事例があった。活動先から依頼される事項を学生自身が断ることは難しい。したがって、4年制課程の初年次学生であることや実習前の体験的ボランティアであることを大学側が丁寧に説明し、共通理解を図る必要がある。この課題については、今後改善を図っていきたい。

4. おわりに

全国的な教員不足が社会的に耳目を集めて久しい。文部科学省は、教員の「魅力」の発信を加速し、教員採用試験の早期化・前倒しを本格的に検討している。すでに一部自治体では、学部3年の段階で一部選考の受験が可能になっている。これに伴って、今後は教育実習の実施時期が早期化することも考えられる。あるいは、従来から行われていた学校体験活動・学校インターンシップの内容及び性格がより教育実習に寄せられることもありうる。

このような背景のもと、本稿では、本学科が開講する保育教育職現場体験活動の一年目の実践について、学生の振り返りを踏まえて整理した。いくつもの制約の中で折り合いをつけながら、関係機関等と調整したものであり、今後も引き続き改善の余地がある。2022年度の運営にあたり、以下の3点が課題として挙げられる。第一に、前節で指摘したとおり、ボランティア活動受け入れ機関等との科目の趣旨及びねらいの共有である。本科目は、学生自身がボランティア先を開拓するため、本学を經由せずに調整する場合もある。受け入れにあたって、ボランティア活動のねらいや学生の学修段階について確認をいただく仕組み、体制作りが求められる。

第二に、本科目を一年次必修科目として履修して以降の二年次への接続・連携である。学生の回答で挙げたように、中長期にわたって学級に入ったり、子どもと交流を重ねていくことにより、学生の新たな気づきや発見の機会となったり、保育者・教育者としての成長に寄与することも多い。また、活動の内容や質も変化すると思われる。本学科では、2022年度入学生から、2年次以降に「観察実習（小・特）」及び「保育教育職ボランティアⅠ・Ⅱ」（いずれも選択科目で免許要件科目ではない）を開講している。これらの科目とカリキュラム上、円滑に接続することによって、学生の学びの連続性を担保する体系的なカリキュラムとなっている。今後は、これが実質的なものになるよう、科目担当者の情報共有や関係機関等の密な連携が肝要になる。また、本科目においても、上記の2科目との接続を意識した学生への働きかけが必要になるとと思われる。

第三に、本科目が学生にとって、被教育者から教育者への意識変容を促すきっかけとなることである。最近まで高校生であり、被教育者であった学生が、保育者・教育者として必要な視点や資質・能力を自ら主体的に考え、理解し、行動に移していく過程を支える科目として、本科目のミッションを捉える必要がある。学生の自由記述回答にあるように、いざ子どもの目の前に立った場面で思うように対応できなかつたり、あるいは自分で考えながら試行錯誤が求められることは多い。被教育者のままでは気づけなかった保育や教育の営みの複雑性や文脈依存性等に理解し、保育者・教育者としての視点

を深められるような、科目運営の工夫が今後さらに求められる。その際は、本科目だけでなく、関連する免許要件科目担当者と連携をとりつつ、学生の成長を支える体制が重要になる。

【参考・引用文献】

浅田瞳・古市文章・原清治・芦原典子（2021）「学校インターンシップは教育実習の機能をどこまで代替できるか（2）」『佛教大学教育学部学会紀要』第21号、pp.61-73。

原清治・芦原典子（2019）「学校インターンシップは教育実習の機能をどこまで代替できるか」佛教大学教育学部『教育学部論集』第30号、pp.1-15。

峯村恒平・枝元香菜子・渡邊はるか・藤谷哲・山本礼二（2020）「教員養成課程における『学校を体験する』活動の取り組みと成果－各大学へのアンケートの結果から『学校インターンシップ』に向けて－」『目白大学高等教育研究』第26号、pp.81-88。

謝辞

本科目は、ご多用の折にご講義を快諾くださった関係各位と新型コロナウイルス感染症により見通しが立ちづらい中でボランティア学生の受け入れにご尽力くださった関係機関の皆さまによって成立しています。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。本科目は筆者の他、保育教育学科梶間奈保准教授、本学教職センター青山啓子特任教員及び同センター赤木寛子特任教員と中心になって共同で運営しました。